

山田方谷の門人たち

「山田方谷」といえば、岡山県の人物の中でも特に有名な一人として知られています。

山田方谷は、江戸時代末期の備中松山藩（高梁市）で重役を務め、幕末の激動の時代に藩政改革を実施し、財政の立て直しや兵制の近代化など大胆な改革を実施した人物です。

元は百姓身分の生まれで、学問を志しましたが、その才能を買われ藩主・板倉勝静に大抜擢を受け、藩政の中枢を担いましたが、明治維新後は新政府に仕えたり、政治家として活躍することもなく、教育者として地域の子弟に学問を教え、多くの門人を育てました。その門人たちは、備中のみならず、備前・美作をはじめ各地から集まりました。「山田方谷



山田方谷



牧野照の父・岡山

先生門下姓名録」（「山田方谷全集」）には、その多くの門人達の中に、現鏡野町域の人物が二人掲載されています。

一人は、久田上原出身の牧野照です（当時の名は馬之允）。照は、医者・牧野岡山（宗玄）の三男として生まれました。父の岡山は久田上原で医業を営みながら、塾を開いて多くの子弟に学問を教えており、自身の子供達には一流の学問を学ばせるため、二男の競には漢学者・儒学者として有名な備中の阪谷朗廬に学ばせ、照には明治三年（一八七〇）から一〇年（一八七七）まで、方谷が母の出身地である小阪部（新見市大佐）で開いていた小阪部塾に入塾させます。照がどのくらいの期間方谷の下で

学んだのか定かではありませんが、退塾後は上京してドイツ語を学び、独逸義塾という学校を創立して教鞭をとりまわります。その後、司法大臣・山田顕義（松下村塾出身の長州の政治家・軍人）の知遇を受けて司法省に出仕し、その後海軍省に転任、参謀部第二課長となりますが、自由党総理・板垣退助と意気投合し、海軍省を辞職、自由党に入党して民間の海軍通として党内に重きをなしたそうです。明治三十六年（一九〇三）に東京で死亡しました。

もう一人は、香々美出身の中島源治です。源治の家は、江戸時代に代々大庄屋を勤めていた中島多右衛門の分家にあたります。父・半平はのちに、多右衛門の息子・衛らと美作の民権運動にも参加した人物ですので、先進的な才覚を身に着けた人物であったのでしょうか。このような人物ですから、半平も息子である源治に、近郷でも有名な教育者であった方谷の下で学ばせたいと願ったのでしょうか。源治は方谷の門人が開校した知本館（美咲町大戸下）で、方谷から学びました。当時方谷は、閑谷精舎（閑谷学校・備前市）でも毎年春秋に一・二ヶ月滞在して教鞭をとっており、その帰途に知本館で教師をしていました。知本館で教師をしたのは、明治六年（一八七三）十二月からで、明治九年まで閑谷精舎で教師



中島源治

をしていましたので、源治が学んだのはこの期間中のことでしょう。

源治はその後地元に戻り、明治二十二年（一八八九）から香々美南村の初代村長を二年二ヶ月、村会議員を十八年務めました。そして明治二十八年（一九一五）に芳野村において、作楽製糸株式会社が設立された際（「広報かがみ」の「平成二十六年一〇月号参照」）には株主となり、監査役も務めるなど地方自治と殖産興業に力を注ぎました。

このように牧野照も中島源治も、中央と地方とで活躍の場こそ違いましたが、方谷の門人にふさわしい、輝かしい業績を残しています。

参考：『山田方谷全集』、『山田方谷』（岡山県立博物館図録）、『苦田郡誌』、『鏡野町史』史料編、『美作大庄屋・大年寄記』、『我村之現勢』

指導：協力…高宮惇、森俊弘、香南公民館

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733